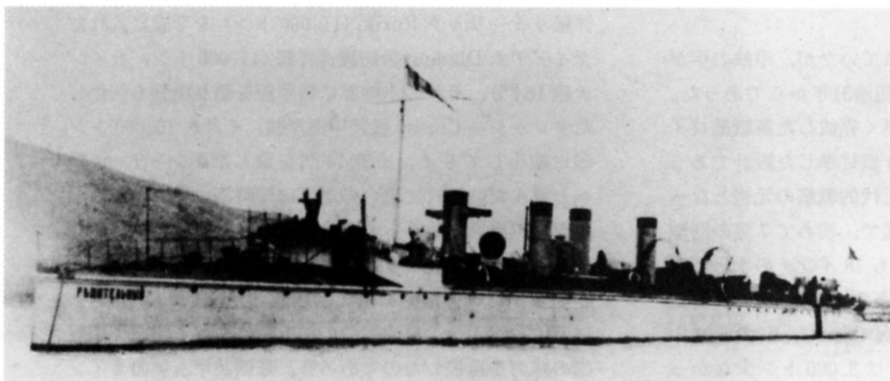


攻勢機雷戦ならず 日本海海戦秘話

NEVER EXECUTED OPERATION AT TSUSHIMA——JAPAN'S OFFENSIVE MINE WARFARE

by Tsutomu Nakagawa



中川 務

ロシア駆逐艦レシーテリナイ Ryeshitelni。本艦を捕獲した日本海軍は、これを暁と改名し、攻勢機雷戦の先陣とする計画をたてた。

日本海海戦を語るにあたって、東郷平八郎司令長官が緒戦に断行した敵前大回頭は、あまりにも有名である。そのためか、この運動が海戦前から精密に練り上げられた戦策であると考えられ、実は奇想天外ともいふべき攻勢機雷戦で幕を開ける計画だったことは、ほとんど知られていない。

この作戦を説明する前に、日本海軍が開発した連繫水雷と称する新兵器について触れる必要がある。この水雷は明治37年8月の黄海海戦の際に、ロシア艦隊の前方を通過中のわが駆逐艦が石炭灰を海中に投棄したのをロシア側が機雷の敷設と誤認したという情報があり、これにヒントを得た連合艦隊参謀秋山真之中佐が発案したものといわれる。

この案を受けた艦隊付属敷設隊司令小田喜代蔵中佐以下はさっそく研究を進め、十数回の実験の後、明治37年10月末、球形電気機雷4個をマニラ索で連結した特殊機雷を完成した。この特殊機雷は投下後15分で発火待機状態になって浮遊し、1～1.5時間後に無効になる。その間、敵艦が連繫水雷の1個に衝突しても、付近の索が張力で切断されるので、敷設線はそのまま維持される。

明治37年10月の連合艦隊訓令では、連繫水雷は主として駆逐隊、水雷艇隊の夜襲に使用するものとし、第2駆逐隊に試験的に搭載するとともに、中村静嘉大佐を長とする委員会を設けて改良に努め、明治38年1～2月には駆逐艦雷と捕獲船の満州を使用して速力20ノットで機雷を投下するのに成功した。このようにして日本海軍は史上最初の洋上における攻勢的機雷戦術を完成したのである。

明治38年春、鎮海湾で戦備を整えつつあった連合艦隊は、ウラジオストクへの避航を図る敵艦隊を確実に捕捉

撃滅するために、さまざまな戦策を検討していた。

バルチック艦隊がシンガポール沖を通過した直後の4月12日に一般的戦闘方針を『単隊ノ戦闘ハ丁字戦法、2隊ノ協同戦闘ハ乙字戦法ニ準拠スルモノトス』と定めたが、4月21日には『第1戦隊ハ敵ノ主隊ヲ迎ヘ其先頭ヲ圧迫攻撃シ其転針スル方向ニ向首シテ之ト戦闘ヲ持続ス』と追記し、斜めから並行に近い対峙で戦闘を行なう決心を明らかにしている。この時の戦策では、機を見て砲戦中の第1戦隊の前方に進出した第9艇隊が、急変針して敵に迫り魚雷攻撃を行なう予定で、この部分にすでに攻勢機雷戦の萌芽が見られる。

このように日を追って具体性を増しながら、検討を加えた連合艦隊の戦策は、5月17日の聯隊機密第259号の3で概略次のような重要な改定を行なった。

▷浅間(装甲巡洋艦)、第1駆逐隊、第9艇隊で臨時奇襲隊を編成する。

▷奇襲隊は並行戦中の第1戦隊の後尾に占位し、機会を見て敵の前方に進出、第9艇隊は連繫水雷の投下と魚雷攻撃を実施する。

特に駆逐艦暁は、第1駆逐隊僚艦の掩護を受け、蒸気と有煙火薬で隠蔽しつつ敵主力の前路を包塞するように連繫水雷と疑水雷を投下する。

ここで話題をいったん変えて、攻勢機雷戦の中心になる暁について説明しておきたい。

本艦は明治37年8月12日、芝罘で捕獲したロシア駆逐艦レシーテリナイ Ryeshitelni の後身で、翌38年1月17日付けの令達では、『捕獲駆逐艦「レシーテリナイ」ヲ暁ト命名シ其本籍ヲ仮ニ佐世保鎮守府ト定メ当分ノ内帝国駆逐艦暁ノ代用トシテ其定員及信号符号ヲ襲用セシム』と定めている。初代の暁は明治37年5月17日、旅順沖

で触雷沈没しているが、レシーテリヌイはこの艦の2代目ではなく、代用として取り扱うという、きわめて不自然な処置が取られたのである。

佐世保で整備を終えた暁は、明治38年4月17日付けで連合艦隊に編入され、5月1日に艦長原田正作大尉指揮の下に佐世保を出撃して、鎮海湾に向かった。5月14日、対馬北西の荒れた海面で他艦と合同して実施した訓練では『沈着大胆ニ行動スル時ハ、成功ハ殆ド疑ヒナシト認ム』と報告している。攻勢機雷戦は、この直後の5月17日に発令されたのである。

さっそく暁は、戦策に従って5月20日、マスト、デリックなどを捕獲船閑東丸に移載し、翌21日、連繫水雷8連群(32個)と浮標(疑水雷として使用)を搭載のうえ、識別線と艦名を抹消した。ここに至って、レシーテリヌイに取られた日本海軍の奇妙な処置の本意が、ようやく明らかになる。敵主力部隊の至近に連繫水雷を投下するため、旧ロシア駆逐艦である本艦を使用するのが最も効果的であり、その意図を隠蔽するために戦没した暁が健在であるかのように見せる必要があったのである。

5月17日、連合艦隊が策定した攻勢機雷戦は、世界の海戦史上、画期的なものであった。

右下の図が示すように、第1戦隊が並行砲戦を開始するとともに、その陰から突進した暁などが敵艦隊の前路に半径1,000メートルの半円を描きつつ、連繫水雷9連群(36個)を投下する。これを見たロシア艦隊は機雷を避けようとして16点回頭するであろうが、その回転圏は800メートル程度で敷設線の回避はむずかしく、触雷、あるいは隊列を離れる艦で極度の混乱に陥るに違いない。この時、第1戦隊は第2戦隊と協同して丁字または乙字を描き、殲滅的な集中砲火を浴びせる予定だったのである。この作戦が成功していたら、日本海海戦は昼戦のみで終結していたであろう。

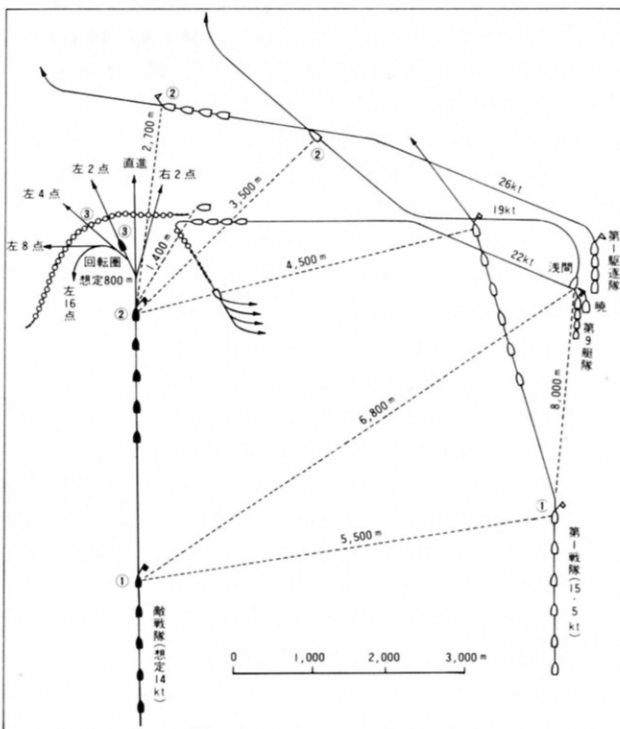
5月27日、信濃丸の報告を受けた連合艦隊は勇躍して鎮海湾を出撃した。この時、朝鮮海峡付近は前日雨の雨が上がったものの風が強く、軽艦艇の行動が危ぶまれた。もし、波が高ければ、デリケートな操艦を要する攻勢機雷戦の実施は不可能になり、精髓を傾けて練り上げたバルチック艦隊撃滅の秘策が崩壊してしまう。鎮海湾出撃に際し、秋山参謀が軍令部長宛ての発電の末尾に追加した『本日天気晴朗ナレドモ波高シ』の電文には、攻勢機雷戦の成否に関する強い不安が含まれているとみなすべきであろう。

しかし不幸にして、この危惧は的中した。当日、朝鮮海峡を吹き抜ける西南西の風は風力5~7に達し、主隊に後続する水雷艦隊の傾斜は60~80度に及び煙突から波浪が侵入するほどで、続航不能と見た旗艦三笠は8時50分、まず水雷艦隊に『航海ニ困難ナラハ三浦湾ニ避ケ

時期ヲ見テ艦隊ニ合スヘシ』と命じた。このなかには奇襲隊に属する第9艇隊も含まれ、乗員から「なぜ、反転するのか」「これでは奇襲作戦はどうなるのか」という叫びが相次いだという。残りの奇襲隊は、それから1時間余り波浪と戦いながら進撃を続けたが、風が弱まる気配がないため、10時8分、三笠は『奇襲隊列ヲ解ク所属隊ニ帰リ列ニ入レ』と指示し、攻勢機雷戦はあっけなく未発に終わった。

攻勢機雷戦の断念後、緒戦の対勢、特に同航戦と反航戦のいずれをとるか三笠艦上では議論が分かれた。この経緯については本論の範疇外なので省略するが、最終的に東郷長官の決断により、敵前大回頭を敢行して敵の針路を圧迫し、砲力の優位を発揮して圧倒的な勝利を得た。しかし、この時に発案された連繫水雷は、その後も改良を加え、1号機雷として対決戦用の機密兵器に組み入れられた。そのために攻勢機雷戦は軍機の壁に封じ込まれ、丁字戦法が、さながら予定の戦策であったかのように伝えられた。

一方、暁は連繫水雷を使用する機会が消滅して変則的な艦名を付するの必要がなくなり、明治38年10月19日付けで正式に山彦と命名され凱旋観艦式に参列したが、戦勝の基礎になった日本海海戦で本艦が果たしたかもしれない重要な任務に気付いた人はなかった。レシーテリヌイ→暁→山彦と艦名を変えながら日露戦争を生き抜いたこの小型駆逐艦は、日本海海戦の秘密を抱いたまま消えて行ったのである。



攻勢機雷戦の想定図 (明治38年5月17日策定の連合艦隊戦策より)